



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学



2011年
10月発行
通巻 第9号

FDニューズレター

巻頭言

本学のFD活動を新しいフェーズに

学長 長谷川 淳

文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」に選定されて、平成20年度から平成22年度までの3年間にわたって全学的な取組として推進してきた本学の「ICTによる自律的FD推進モデルの構築」プロジェクトは、所期の成果を達成して終了することができ、本年度から本格的な実施のステージに入っています。幸いにもこの取り組みは、「他の参考となる優れたものである」として多方面から注目されており、有り難いことであると考えています。これは間違いなく、「教職員の力の結集が学生を変える」を標榜した関係各位の真摯な取り組みの成果であると考えていますが、同時に、今後は全教職員が積極的に参画するFD活動として定着させなければならぬこと、および今後も継続的な改善努力を積み上げる必要があることを再認識し、あらためて身の引き締まる思いでいます。

現在の我が国の高等教育、特に大学は、大衆化、ユニバーサル化の時代に直面し、大学全入時代とも言われる状況にある中

で、受け入れた学生には、学士課程あるいは修士課程修了時点において学士（あるいは修士）という学位に相応しい能力を身に付けることができるような教育プログラムを展開し、実践することが求められています。この能力には、「幅広い教養」、「基礎的・汎用的な能力」、「基礎的・基本的な知識や技能」、「専門的な知識や技能」、「意欲、態度や価値観」、「論理的思考力や創造力」などが含まれます。どのような能力を、どの程度の水準まで身に付けさせようとするのかは、個々の大学がその建学の理念や使命、教育の目標や目的に沿って定めることになり、それがそれぞれの大学の個性となることは言うまでもありません。しかし、これらの能力の達成度の水準は、大学が自己満足的に設定すれば良いものではなく、学位に相応しいものとして国際的に通用する水準（最低ここまでには達して欲しい「ベース水準（仮称）」）でなければなりません。

現在、文部科学省の中央教育審議会での議論を含め、多くの機会において、大学教育の質保証が重要なキーワードになっています。「教育の質」は、本質的には、教育に携わる教員がその責任において、担当する教育科目等で育成することを目標と

目次

1. 巻頭言…………… 1
2. CANVASの役割と仕組み 2
3. 学生FDサミット2011夏報告…………… 6
4. 第6回カリキュラム・アドバイザーボード会議開催報告…………… 8
5. 教育ITソリューションEXPOの参加報告…………… 10
6. ICT利用による教育改善研究発表会に参加して…………… 12
7. 大学間連携SD研修会参加報告…………… 14
8. FD活動 行事（実績・予定）16
9. FD委員会WGの活動実績16
10. 編集後記…………… 16

発行：北海道情報大学

した能力について、教育を受けた学生の達成度が「ベース水準」をクリアできるようにすることにより保証されるものであることは言うまでもありません。しかしながら、それを確実に担保するには、「教育の質保証」について何らかの客観的な仕組みを作る必要があるのではないかと議論の対象になっている訳です。

「教育の質」は教員がその責任において保証するという本質に立ち返ると、鍵となるのは教員の教育能力です。FD活動の本質は、教員の教育能力を高め、

学生の能力が「ベース水準」を確実に超える高い水準に達するようにすることにあります。本学のFD活動の枠組みは、このための強力な支えとなっています。いわば本学における「教育の質保証」はその活用にかかっているとと言えるでしょう。

私は、本学におけるFD活動は、現在、新しいフェーズのスタートラインに立っていると考えています。構築した「ICTによる自律的FD推進モデル」は本格的な実施段階に移行したから新しいフェーズに入ったというわけではありません。他大学と同

様、本学においても教員の世代交代は着実に進みます。このFD推進モデルに馴染みのない多くの教員を新たに迎えることになります。新任教員の皆さんに、いち早くこのFD推進モデルに馴染んでいただき、活用してもらうようにするためには何をどの様にすべきなのかについて、真剣に考えるフェーズに達したと考えます。また、各教員の教育能力をより高めるための方策についても、改めて考えていきたいものと思います。

新しいフェーズに確かな足取りで踏み込んで行きましょう。



北海道情報大学 CANVASの役割と仕組み

FD・WG7 山北 隆典

1. CANVASの役割

大学の全入時代を迎え、これまでになく多様な学生が増加している中、大学教育の質の保証が求められています。2008年には大学に対してFD(Faculty Development)が義務化されました。FDとは、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称です。FD活動が先行している米国の大学ではICT(Information and Communication Technology)やID(Instructional Design)を活用することで個々の教員が授業改善を図り、改善の実績を着実にあげています。本学でも、これまで行われてきた授業を改善し、教員の教育力を高めていく必要を認識し、FDを「教育の質的向上を図るための組織的に取り組む活動」と位置付け、組織的な授業改善へ取り組んできました。

本学ではFDを実施するにあたって、授業改善に対するPDCAサイクルを取り入れ、半自動的にサイクルを回す「自律的FD推進モデル」を構築しました(図1参照)。すなわち、日々の教育活動を進めて行く中で、授業改善計画やシラバスを作成する計画(PPLAN)フェーズ、ICTやIDを活用した教材開発およびICTを利用した授業の展開や小テスト・レポ

ート添削による指導、授業日誌の作成といった実行(DO)フェーズ、そして、学生による授業評価や教員相互によるピアレビューを実施し、その結果を確認する評価(CHECK)フェーズ、更に、自己点検や必要な研修をeラーニングで受講する改善(ACTION)フェーズからなるサイクルを自律的に回していくものです。しかし、我が国では、キャリアの中で教育方法に関する知識やスキルを習得する機会を有してきた大学教員は少なく、自らの授業改善を個々の教員の努力に委ねることは困難であるといえ、何らかの支援が望まれています。そこで、本学の強みであるICTを有効に活用し、授業改善を支援するシステムとして、CANVAS(Creative Activity for Nurturing Value-Added Students by using a Faculty Development support system)が開発されました。

CANVASの役割は、教育方法に関する知識やスキルを習得する機会のなかった大学教員が、自律的FD推進モデルに則ったPDCAサイクルを円滑に実施できるように支援することにあります。

CANVASでは教員の教育活動における様々なデータをファカルティポートフォリオと名付けたデータベースに蓄積しています。CANVASは、ファカルティポートフォリオに蓄積されたデータから、各教員のFD成熟度を判定します。FD成熟度とは、教員のICTやIDの活用度、PDCAサイクルの履行度合い

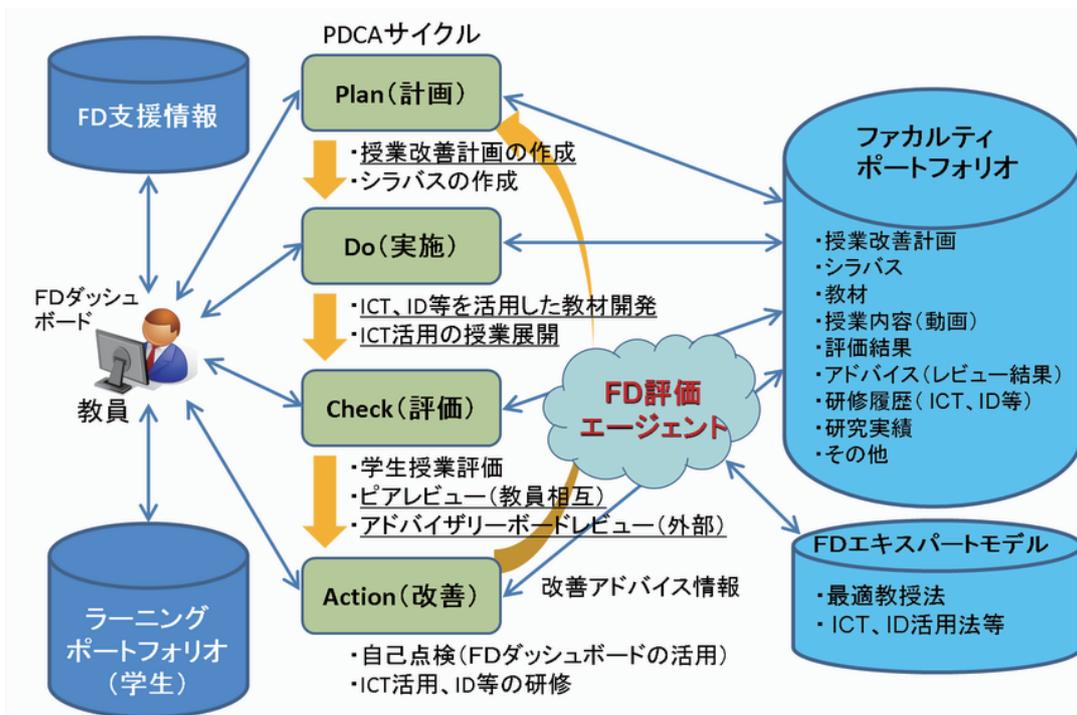


図1 自律的FD推進モデル

を数値化したもので、例えば、ICTの活用度では1から5までのレベルを定義しています（表1参照）。FD成熟度はCANVASのFDダッシュボード（図2参照）という画面からいつでも閲覧できるようになっています。現在、各教員のICTの活用度がレベル2になることを当面の目標にしています。

表1 ICT活用度

レベル	利用形態	ICT
1	教材の提示 (教える内容の可視化) LMSを使った教材の提示、小テスト	Power Point 等 POLITE クリッカー
2	課題提出 双方向性の授業展開 (理解度の確認)	
3	授業内容の ビデオ・オン・デマンド	LMS
4	疑似環境での学習体験	ゲーム セカンドライフ
5	学習者適応型学習	POLITE

また、CANVASは、PDCA管理機能によって計画、実施、評価、改善のフェーズ毎に、各教員の活動実施状況をファカルティポートフォリオで管理しているので、個々の教員に対し、自らの授業改善に向けて次に取り組むべき活動を促すアドバイスを提

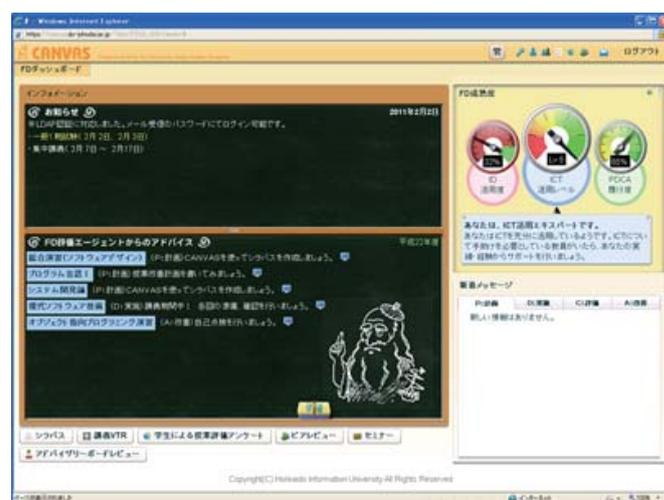


図2 FDダッシュボード

示できます。このアドバイスもFDダッシュボードで閲覧できるので、CANVASを利用している教員は、自然と授業改善のPDCAサイクルに則ってFD活動に取り組むことができるようになっていきます。もちろん、各フェーズの活動において閲覧すべきデータ、例えば、自らが行った講義の映像や学生による授業評価アンケートの集計結果は、それぞれ図3、図4のような洗練されたユーザインタフェースを通じていつでも閲覧でき、日々の授業の改善や、授業計画の改善に役立てることができます。学内で実施された研修映像（図5参照）もスタッフの手によってファカルティポートフォリオのコンテンツとして格納されており、いつでも閲覧できるようになっています。



図3 講義映像



図4 授業評価アンケート結果



図5 研修映像

2. CANVASの仕組み

CANVASの物理的なシステム構成としては、WWWサーバをベースに基本機能を実装したサーバと、映像配信サーバから構成されており、学内だけでなく自宅や出張先からでも利用することができます。その他に、授業映像の録画システムとして授業録画サーバと動画変換サーバがあります（図6参照）。この2つのサーバは、本学に隣接する北海道情報技術研究所（HiIT）内のeラーニング推進センター（CED）に設置されています。

ゼミ室を除くほぼ全ての講義室にはネットワークカメラ設置されています。ネットワークカメラからの映像および音声データは授業録画サーバが受信し、26講義室同時に録画しています。録画データは、夜間に動画変換サーバによって配信可能なFlashビデオ形式に変換して、eラーニング推進センターに設置されているNAS(Network Attached Storage)に保存しています。映像配信サーバはクライアントからの動画再生要求を受け取るとNASから直接デー

タを読み込み、当該クライアントに配信します。

クライアントプログラムは、クロスプラットフォーム対応のフレームワークであるAdobe Flexで開発しています。

CANVASは、ファカルティポートフォリオを介して、学内の他の情報システムと連携してその役割を果たしています。履修登録と単位・成績に関するデータ、授業の時間割、シラバスなどは教務システムに管理されています。学生による授業評価アンケート結果も個別のシステムで管理されています。学生の出席情報は、e-アシーナシステムと呼ばれる出欠管理システムで管理されています。ラーニングポートフォリオ、学習履歴などはPOLITEと呼ぶLMSで管理されています。このように、CANVASは本学に構築されている各々の情報システムと連携して、それらのシステムから必要なデータを取得しています（図7参照）。

以上、述べてきたように、CANVASは「自律的FD推進モデル」の実装であり、本学教員が日常的にFD活動を実施するための支援システムです。現在も改良を加えつつ、完成度を高めるよう鋭意、開発が

続けられています。多くの教員に活用いただき、ますます有用なシステムになることを期待しています。

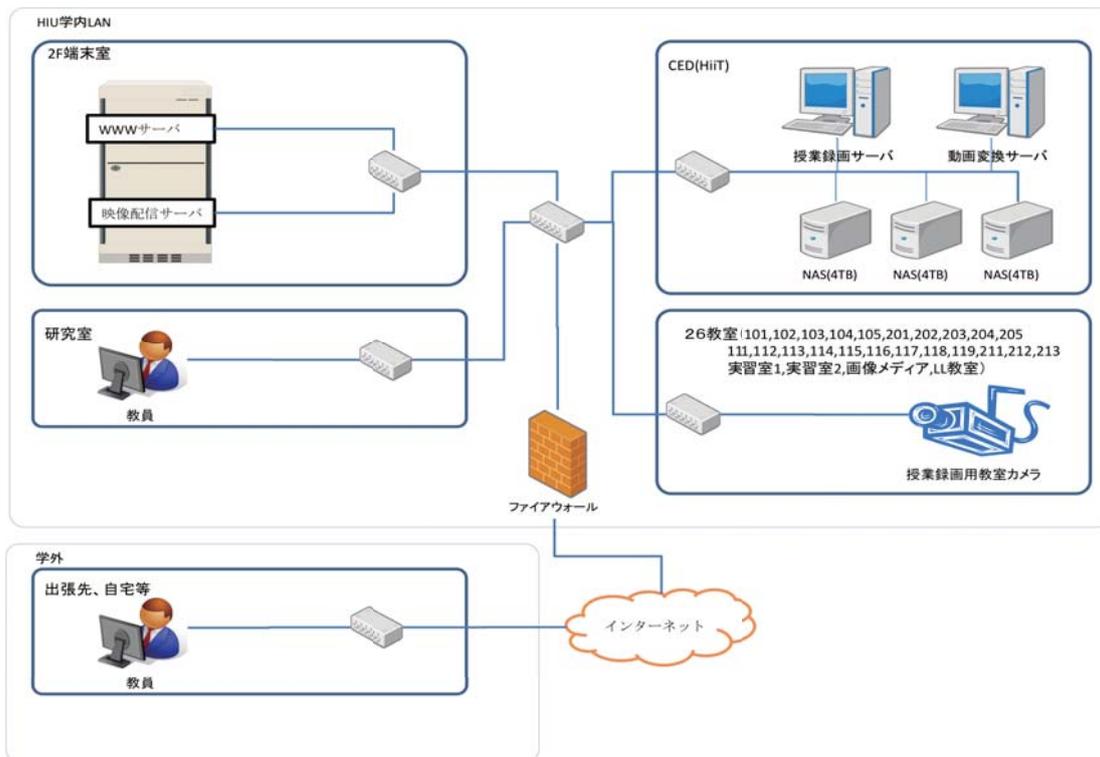


図6 CANVASのシステム構成

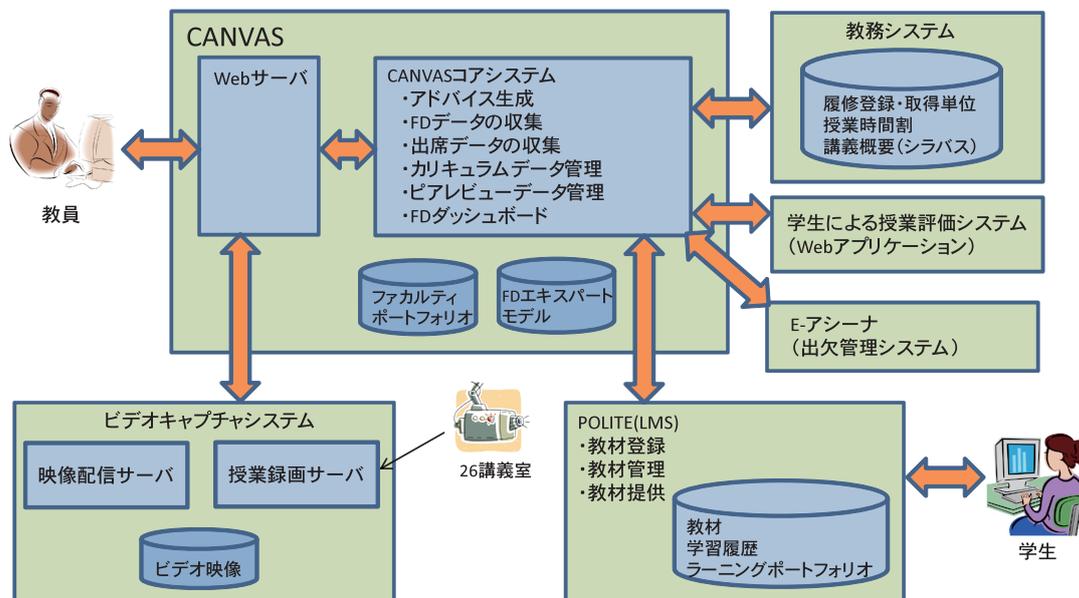


図7 CANVASと他のシステムとの連携

学生FDサミット2011夏 報告

経営情報学部 医療情報学科

上杉 正人

8月26、27日、全国34の大学から271名の学生が京都の立命館大学に集まり「学生FDサミット2011夏」が開催された。本学から3名の学生を引率して参加した。他大学との交流とワークショップが行われた。以下に彼らの報告を掲載する。



情報メディア学部 情報メディア学科 3年

池田 知明

私たち学生FD委員会は8月27日、28日に京都の立命館大学で行われた学生FDサミットに参加しました。このサミットは他大学との交流やディスカッションを通じて自分たちが学生FDとして何をすればいいのか、何をすべきなのかを知るためのもので、参加大学は、北は私たち北海道情報大学、南は鹿児島大学までの計42大学と、とても大規模なものでした。

サミット初日のオープニングでは「学生FDの祖」と呼ばれる木野茂教授が「これからの大学教育は先生から学生への一方向の教育から、先生と学生が双方向に行う教育にパラダイムシフトしなければならない」とおっしゃっていました。これを実現するには先生方の努力もさることながら、学生自身の協力も必要と感じました。

次にディスカッションの前にアイスブレイクを行いました。ちょっとしたゲームや雑談を通じて次のディスカッションへの緊張を和らげるという目的で行ったイベントでしたが、その雑談の中でも、それぞれの大学が持つ不満点が見え隠れしていました。特に学食のスペースに関しては大きな大学ではとにかく数が足りなかったり、また小さな大学では質や値段についての不満が出たりと大学の規模によって出てくる問題点が違ってくることがとても興味深かったです。

その後、グループに分かれてのディスカッションを行いました。今回は「どんな授業がいい?」「大学で何がしたい?」「課外活動って必要?」の3つのテーマについて1テーマごとに複数のグループが議論し、最終的に1テーマにつき1グループが代表として発表するという形式でした。私が参加したグループでは「大学で何がしたい」というテーマについて話し合い、初めは「保険についての講義が欲しい」や「課外活動がしたい」などいろいろな意見が出てきてとてもまとまりそうにはありませんでした。しかし、大学とその他の教育機関との違いや、学生として学ぶことの意義を突き詰めた結果、私たちのグループは「自分の可能性、出来ることを探すためのあらゆる行動」という結果になりました。惜しくもテーマの代表になることはできませんでしたが、自分でも納得できる答えになったと思います。

このサミットに参加して、私は参加している学生の意識の高さにとても驚きました。各大学のFD活動の発表もとても生き生きとした活動を行っているのが伝わり、また、ディスカッションのグループの学生のほとんどが、ボランティアを始めとする課外活動を積極的に行っている方がほとんどでした。そしてサミットの枠外でも他大学との交流を深めようと個人で交流会を企画する人が居たりするなど、自分がいかに思想なく大学生活を送っているかを痛感しました。今後サミットに参加した皆さんと同じ土俵で話ができるように、まずはこの大学で行う学生FDの活動を成し遂げたいと思います。



情報メディア学部 情報メディア学科 3年

知久 貴大

今回、立命館大学の学生FDサミットに初めて参加し、大変貴重な経験をさせて頂けたと強く感じています。私は以前に札幌大学で1日開催された「つばトーク」にも参加しましたが、学生FDサミットは2日間の開催なので、より深い討論や交流ができたと思います。

今回行われたテーマ別討論で、私は「課外活動は

必要？」というものを選びました。理由は演劇サークルを設立し、代表を務めているということがあったためです。グループ内では各自どういう活動してきたか、といった話題から始まり、課外活動とはどういうものなのか、どういうメリットがあるのかなどについても取り上げました。私たちのグループでは、「学校に関わりがあり、かつ主体的に活動しているもの」を課外活動の定義としました。そして課外活動には様々なメリットがあり、なにより楽しいものであるから必要だ、と結論づけました。しかしここで私たちが特に注目したのは、大学生活などに満足していない人、人との関わりを持ちたいと思っている人です。そういった人たちでも、自分に合った活動を行うことで積極的に大学生活を楽しむことが出来るのではないかと考えたのです。私たちはそうした人達にむけて「きっかけ」をあたえるのも重要だ、としました。実際に私も学内の説明会で学生FDのことを知り、こうして他大学で様々な人達と交流や意見交換をすることで、学生FDに限らず、大学生活など様々な事に対してのモチベーションが上がっています。私はこうした活動のお陰で充実した大学生活を送れていると強く感じています。

この討論を通して、私は課外活動の大切さを再確認したと共に、このようなイベントへ参加させて頂けたことに対して、深く感謝しています。今後もこのようなイベントには可能な限り積極的に参加し、活動の糧にしていきたいと思っています。

経営情報学部システム情報学科 木村 匠

サミットの議論のほとんどがグループワークに時間が割り当てられました。ランチミーティングでは、小グループに分かれて交流をしましたが、はじめはちょっと気後れしてしまっていて発言が減ってしまったのは反省しもう少し勇気を出したいなと思います。そして、グループワークでは3種類のテーマに10グループにそれぞれ分かれて討論し、グループごとに合意形成をしました。その前に全体テーマとして「どうして大学に来るのか？」というテーマで話をしましたが、普段は私自身が自分の目標の為に動いていたので、全然違う考え方、例えば人脈を作りに来ているとかただただ皆が行くものだから行かなきゃならないからという理由などがあり新鮮でした。

その後、私のグループでは「どんな授業がい

い？」というテーマで討論しました。コーディネーターからの提案で逆に「悪い授業」の問題点の洗い出しから開始しました。洗い出しは私も割と発言していったのですが、ではその原因は？といったときにその種類を集約し、「授業に出たくない授業」そもそも授業と呼べない物と反対に「行きたい授業」やさらに改善すればよい授業になると、2つに分かれるという見解になりました。1日目はここで終了し、チームでは宿題とし「授業に出たくない授業」と「行きたい授業」のそれぞれを良くするにはどうしたらいいのか？を持ち帰り検討することになりました。

懇親会ではものすごい活気で、こんなにも情熱にあふれる人達がいるのだと心強く感じました。また、非公式に二次会が行われ、ノミネーションでさらに学年や大学関係なく、ざっくばらんに腹藏無く意見をかわし皆考えは違えども良い大学や授業にすることに苦心していることが感じられました。

2日目は引き続き話し合いを続行し、それぞれが発表した後、その中で光る全国で良い授業を競う大会を行うのをブラッシュアップしていきました。その途中では、テーマとはそれるけれども今後活動する上でキーになりそうなフレーズも出てきていました。また忌憚なき意見が飛び交い、私は主案にどんどん肉付けを行いチームに貢献できたと思います。

テーマ別コンペでは、4位となってしまいましたが、アイデアとしては大変良い物が出来たとチーム一同悔いの残らない2日間となりました。これを実現するために今後活動をしていきたいと考えています。

「お悩み解決」のパートではどこも同じ悩みを抱えていてなかなか妙案は無く地道に活動していくほかにやはり無いなと考えています。最後に、もう残り半年しか在籍できませんが、大変モチベーションが向上し、何か残していかなければと思っています。また、同行した後輩達も積極的に質疑に参加しているのをみて、よい刺激になったのではないのでしょうか？今後とも継続的に参加させていただけたら幸いです。



第6回カリキュラム・アドバイザーボード会議
開催報告

WG8（カリキュラムディベロップメント）
澤井 秀

カリキュラム・アドバイザーボードは、主に企業における経営、情報、メディア、医療及び教養の各分野で高い見識と経験を有する10名程度の外部アドバイザーを持って組織することになっていて、全学教務・FD委員会委員長（富士副学長）の求めに応じ、本学のカリキュラム及び教育活動が、社会のニーズの変化や情報技術の進展等に適切に対応しているかをレビューし、その結果を委員長に意見を具申するものとされている。

WG8では、時代を先取りしたカリキュラムを開発することをミッションとして、平成20年度から取り組みを開始し、初年度に9名の外部アドバイザーから構成されるカリキュラム・アドバイザーボードを立ち上げて、第1回カリキュラム・アドバイザーボード会議を開催した。外部アドバイザーの方々からは、その後引き続いて同年度末まで、カリキュラムレビューWebシステムを通して追加のコメントをいただいた。

カリキュラム見直しの基本方針は、「育成すべき人材像とコンピテンシー（知識、スキル）を明確にした上で、それを実現するためのカリキュラムを策

定する」というもので、平成21年度より上記レビュー及び追加コメントに基づいて平成23年度カリキュラムの策定に取り掛かり、カリキュラム・アドバイザーボード会議を通して外部アドバイザーの方々から貴重なご指摘をいただきながら原案をブラッシュアップして行ってまとめ上げ、平成22年5月の両学部教授会で審議、承認され、当初のミッションが達成された。

平成22年9月の第4回カリキュラム・アドバイザーボード会議からは、各回ごとにテーマを定めて外部アドバイザーの方々からご意見・ご指摘を賜る方式となり、第4回会議では「中長期的な視野から望まれる教育分野」、第5回会議では「モチベーションについて - 企業等の事例から学ぶモチベーション向上への対策 -」のテーマの下、多くの有益なコメントをいただいた。今回の第6回会議では、「卒論から見えてくるもの」をテーマとして、外部アドバイザーの方々に卒業記念小論集を事前配布し、お目通しいただいている。

第6回カリキュラム・アドバイザーボード会議は、平成23年9月2日（金）午前11時から午後3時半まで115教室にて開催された。始めに富士副学長より挨拶と外部アドバイザーの方々の紹介があり、引き続き、両学部全4学科の各学科長及び教養部長から「育成すべき人材像とコンピテンシー」に関するプレゼンが行われ、昼食をはさんで午後一より、外部アドバイザーの方々から多くの貴重なご指

外部アドバイザーのメンバー一覧（平成23年度）

分野	氏名	勤務先等
経営	齋藤 義明*	野村総合研究所 コンサルティング事業本部 イノベーション・人材戦略担当部長
情報	明神 知*	株式会社オーグス総研エグゼクティブフェロー ビジネスイノベーションセンター長
	福井 素子*	日本アイビーエム・ソリューション・サービス 株式会社代表取締役
医療	秦 温信	札幌社会保険総合病院 病院長
	小笠原克彦	北海道大学大学院保健科学研究院 教授
メディア	佐々木邦俊*	オフィスKUNI代表
	里見 英樹	株式会社メディアマジック 代表取締役
教養	横山 憲治*	北海道テレビ放送株式会社 参与

(*：今回ご出席いただいた方)

摘をいただいた。

先にも述べたように、外部アドバイザーの方々には卒業記念小論集を事前配布してあったので、かなり具体的で突っ込んだ内容のご指摘を多々いただいたが、ここではその中から特に注目すべきものについて以下に列記する。

1. 「頭でわかること」と「自分でできること」、さらには「他人を動かせること」はイコールではない。しかるに、とかく「コンピテンシー＝ナレッジ」になりがちなので、ナレッジ以外の部分をコンピテンシーに落とし込むことが大事である。
2. 人材像とかコンピテンシーの目標に対する達成度をいつの時点で如何に評価（チェック）するのか、明確にしておかないといけない。
3. 小論集では、「経営を支えるIT」あるいは「経営の重要課題であるIT」という切り口の論文が少なく、「企業研究全般」あるいは「企業案内」になってしまっているものが目に付いた。テーマをもっと深く絞り込んだ方が良い。
4. 論文作成を一つのプロジェクトと仮定して、WBS（ワーク・ブレイクダウン・ストラクチャ）を作ることで、プロジェクトマネージャーのスキル的一端（触り）を身につけることができるのではないだろうか。
5. 卒業研究をチームでやってもいいだろうし、グループ論文もいいのではなかろうか。また、先輩からの継続研究もいいだろう。
6. 参考文献が少ないことから想像するに、情報収集能力が弱いのではないだろうか。先行研究のサーベイは必須。また、ネット情報に偏っている感があるのは問題。
7. 考えが足りないように思える。まずは自分で深く考え、さらには人とディスカッションすることによって十分に考えてから、文章化した方が良い。
8. “考察”が“感想”になってしまっている研究も多く見受けられる。また、研究論文というよりも、レポートの域を出ていないものも多い。

9. 文章に書く能力と、それをわかりやすく説明（発表）する能力の両方が求められる。何も知らない人に知らしめるという訓練が必要である。（最近の若者の特徴：自己表現ができない／声が小さい／質問の意図を表面的にしか理解できない／説明に論理性が乏しく下手）

10. 発表はオーラルセッションだけでなく、ポスターセッションという方法もある。表現は文章のみならず、動画でも、モックでもいいのではないだろうか。
11. 単なる学内での発表会に留まらずに、“北海道情報大学EXPO”のような催しを行うなどして、大学外に対してももっともっと情報発信していく方がいい。
12. オープンキャンパスの時に、ポスターセッションをやるのもおもしろいのではないだろうか。
13. 優秀論文発表会を開催するのも良いだろう。
14. 卒論（フルペーパー）をPDFファイル化し、大学としてアーカイブしたらどうか。
15. 何のために（目的）、どこまで（目標）やったか、自分がやったことの内容に焦点を絞って結果の評価を行うべきであり、そこでは、自分の研究のアピール（自分がやったところ／工夫したところ）をしないとイケない。
16. 複数名の教員による成績評価を取り入れているところもある。

以上の中にはかなり手厳しいご指摘も多く含まれているが、外部アドバイザーの方々には会議ではかなりオブラートに包んだ言い方をされておられたことを付け加えておきたい。

ここに挙げたご指摘は、いずれも示唆に富んでおり、今後、改善に取り組むことによって、卒論のレベルアップ、引いては学士力の向上に結び付けることが期待でき、出席された外部アドバイザーの皆様、並びに文書にてコメントを送付いただいた皆様には、大変お忙しいところ、誠にありがとうございました。ここに改めて感謝の意を表します。

教育ITソリューションEXPOの参加報告

eラーニング推進センター

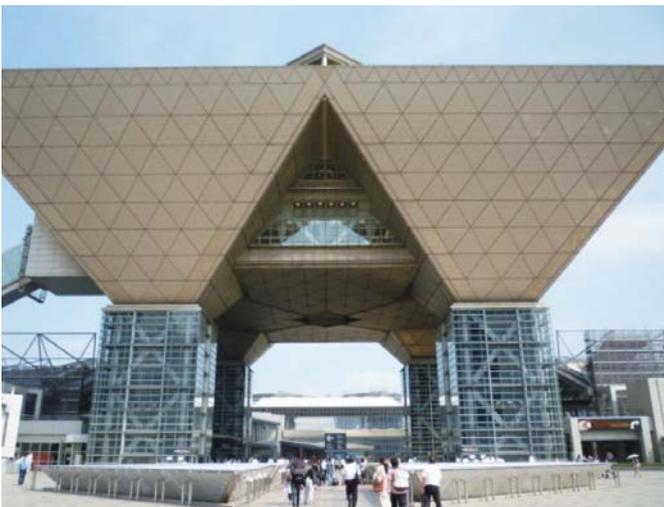
安倍 隆 富士 隆

教育ITソリューションEXPOとは？

昨年の平成22年が第1回の開催で、今年が2回目になります。小学校から高等教育機関までの学校を対象にした教育ITに関するイベントで、展示と専門セミナーの2つの内容からなっています。今回は、昨年まで独自に行われていたeラーニングワールドが本イベントに吸収される形で、平成23年7月7日（木）～9日（土）までの3日間行われました。

実は、昨年の専門セミナーでは、本学の学習者適応型eラーニング（POLITE）が取り上げられ富士副学長が講演されました。

会場は、東京のビッグサイトで、来場者数は、1万人を超える大きなイベントです。教育関係者のみならず、企業関係者の参加も多いようです。



eDCグループとして出展

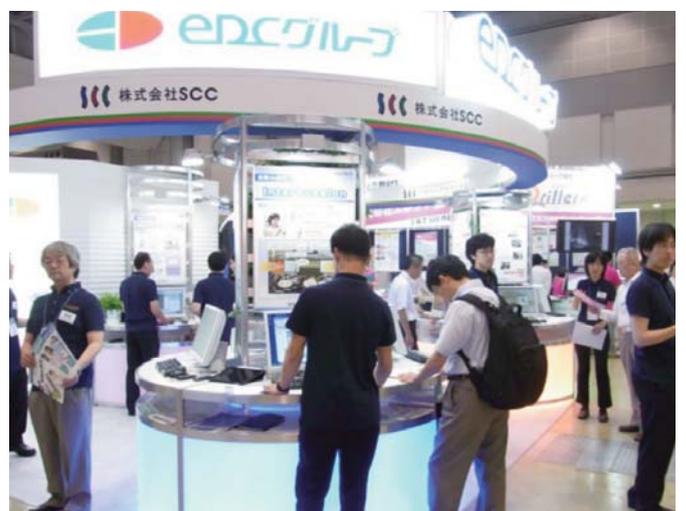
これまでeラーニングワールドにeDCグループの一員として出展してきましたので、今回も同じ形態で出展しました。北海道情報大学としては、eラーニング分野として「無限大キャンパス」と「POLITE」を、FD活動の支援システムとして「CANVAS」を各々出展し、システムのデモによる紹介をメディア教育センターのスタッフが行いました。



賑わいがもどったeラーニングワールド

昨年度のeラーニングワールドに比べ会場も広く、たくさんの来場者があり、3日間共とてもにぎわっていました。ただし、客層が以前とは異っており、出版関係やハードメーカーが多く、大学関係者は少なくなっているようで、eDCグループのe-Learningシステムについての深い技術的な話をする機会は若干減ったように感じました。特に土曜日の7月9日にはその傾向が顕著で、併設している東京国際ブックフェアと国際電子出版EXPO目的の来場者が大量に来たと思われまます。

	本年度来場者数	
	eDCグループ	会場全体
第1日	979名	4,784名
第2日	961名	6,759名
第3日	1,000名	2,217名
合計	2,940名	13,760名



北海道情報大学をターゲットに来てくれている人

- ①例年の傾向ですが、北海道情報大学のe-Learning「無限大キャンパス」を実際に利用してくれている受講生が何人も来場してくれました。また高知工科大学のようにe-Learningの研究者が学生を連れて情報大学をターゲットに毎年来場してくれるのは担当者としてとても誇らしいと感じました。
- ②また今回は、東京農業大学の学習支援課の職員が、読売新聞（7/6版）にて「大学の实力調査 東日本編」の記事を読み、北海道情報大学が定員に対する学生数の値がとて高いことの秘密を探ろうと来場したとのことで、産学連携で品質の高いe-Learningシステムを構築できていることに対して、しきりと感心してくれたのが印象的でした。



プロシューマーの時代到来を実感

- ①従来は専門家に頼らざるを得ないものであった印刷や動画撮影、e-Learningシステムやコンテンツ開発が、プロ並みの品質で誰でも簡単にできるようになってきていることをアピールする展示が目立っていました。
- ②また、子どもたちが授業でタブレット型PCを操作して、簡単に絵本が作れるデモもありました。
- ③アルビン・トフラーが言うプロシューマー（生産者：producerと消費者：consumerとを組み合わせた造語。生産活動を行う消費者のこと。）が、ICT技術の発展によって教育現場でも現実のものとなっていることを強く感じました。

印象的だったタブレットPCとクラウドコンピューティング

iPADのようなタブレット型PCを利用した教育システムが目立ちました。持ち運びが便利で操作も簡単、しかもある程度の画面サイズがあるタブレットPCは、移動中でも手軽に学習でき、また教室内での学習ツールとしても今後さらに普及するものと思われます。

自社内・自学内ではe-Learningのサーバを構築できなくても、クラウド上のサーバ構築サービスを利用することで、手軽にe-Learningを利用できるサービスが、今後プロシューマーを支える技術として普及すると思われます。

Twitterやfacebookのようなソーシャルネットワーキングサービス（SNS）が、今猛烈に普及してきている。こうした考え方を学習に取り入れて、学習者同士の学び合いを活性化する仕組みが、今後e-Learningの分野では盛んになってくると思われます。



谷川 健

私立大学情報教育協会（私情協）主催の「平成23年度 ICT利用による教育改善研究発表会」が、平成23年8月10日に、東京理科大学九段校舎で開催されました。その発表会を聴講してきましたので、発表会の様子および発表内容について報告します。

研究発表会への参加者は、当日配布された資料では約100名です。発表会は、「人文科学系・社会科学系」、「語学系・初年次」、「医療系・工学系・教育系」、「情報基礎・情報専門・家政系」の4つ分野に分かれて実施され、各分野11～13件の発表がありました。私は、「情報基礎・情報専門・家政系」の発表を聴講しました。この分野の聴講者は、題目によって差はありますがおおむね35～45名程度でした。

「情報基礎」では、「デジタルストーリーテリングによる学び合いの促進」（桜美林大学）、「積極的な学習意欲を導き出す為のデジタルゲーム制作を用いたプログラム言語入門教育」（東京情報大学）、「ICTとプレゼンテーションを活用した学生参加型授業の展開」（東海大学）、「SNS利用におけるリテラシー教育」（桐蔭横浜大学）、「ICTを活用したプログラミング教育の実践」（札幌学院大学）の5件の発表がありました。デジタルストーリーテリングとは、発表をリアルタイムで行うのではなく、あらかじめビデオカメラ等で録画した発表内容や必要な資料などを、映像編集ソフトウェア（Windowsムービーメーカー）を使って映像作品として作成させるものです。プレゼンテーションツール（パワーポイント等）を使ってリアルタイムに発表するのと比べて、準備に時間はかかりますが、発表の完成度が上がり、いつでも発表を視聴できるメリットがあります。本学においても、齋藤一先生が同様の方式を採用したeラーニングを開発されており、遠隔授業や非同期な授業では効果が期待できそうです。プログラミングのモチベーションを上げるためにゲームを題材とする発表は、本学におけるプログラミング教育でも検討に値すると思いました。1年前期のC言語によるプログラミングを学ぶ中で、学んだ内容に関する簡単なコードを少しずつ追加していくことにより、それなりに遊べるゲームを完成させるという講義です。講義の主体は、本学と

同様に講義と演習ですが、それとゲーム制作を組み合わせることにより、学生のプログラミングに取り組む意欲を向上させるねらいがあります。アンケートの結果では、プログラミングの理解やプログラミングに取り組む姿勢などの向上に、ゲームが役立っていることが示されました。本学で応用するには、少し工夫がいると思いますが、検討の価値はあると思います。ICTとプレゼンテーションを活用した学生参加型授業の報告では、個人によるレポート作成やグループによるプレゼンテーションの作成を、LMSを効果的に利用することにより、時間外に実施することができたことが報告されました。リテラシー教育にSNSを利用した報告では、SNSをコミュニケーションツールとして認識し使えるようにする講義の紹介がありました。Facebook等のSNSやTwitterなどを使って積極的に情報発信する人材を求める企業が増えていることが、この講義を開始するきっかけのひとつだったそうです。そのため、利用しているソフトウェアも広く普及しているFacebookやTwitterを使っています。使い始めた段階では、自分からの情報発信はほとんど見られなかったようですが、講義の中で利用を促進することによりコミュニケーションツールとして使われるようになったようです。ICTを利用したプログラミング教育の報告では、ここ数年の間に下位層の学生が増加し何らかの対策が必要となり、講義で習った内容の理解度を問う多肢選択式の「理解度確認テスト」を授業時間外で実施し理解を確認させるようにしたとのこと。また、下位層の底上げのために、先週の内容の理解をチェックする「理解度チェック」を講義の最初に強制的に実施することで、一定の成果があがったとのこと。本学では、プログラミングは、プログラミング実習を中心にして知識およびスキルの定着を図っていますが、選択式等の確認テストを使って基本的なところが理解できているかどうかを学生に自覚させることは検討の価値がありそうです。

「情報専門」では、「動機付けとプログラミング能力向上を目指したコースプランの改善」（立命館大学）、「PBL『Webデザイン特別講義』の実践」（静岡理工科大学）、「ネットワーク授業におけるICT個別学習による学習効果の向上」（十文字学園女子大学）、「オープンソースを活用したLinuxサーバ構築授業の改善と成果」（東海大学）の4件の発表がありました。プログラミングに関するコースプランの改善の報告では、プログラミング教育をよ

りよいものにするために、この講義を学んだ学生を2人1組にして、プログラミングにやる気ができるときはどのようなときか、そのためには演習環境をどのように改善すべきかをお互いにインタビューさせて、学習の進め方（コースプラン）に学生の意見を反映する手法がとられていました。比較的学習意欲の高い学生を対象としている手法なので、本学でそのまま利用するのは難しいと思いますが、学生の意見集約のひとつ方法として検討してもよいと思います。Webデザイン特別プログラムの報告では、上位学生をさらに伸ばす方法として、Virtual MallのWebサイト構築という実践的な課題をグループで協調させながら学ばせるという手法が紹介されました。この講義では、実際に使えるシステムの開発を目指しているので、デザイン面の指導者としてプロのデザイナーに非常勤講師として参加してもらったようです。ネットワーク授業におけるICT個別学習に関する報告では、定期テストの結果を分析し、正答率が低い分野のeラーニングを開発し、授業時間外に利用させることにより、成績の向上が見られたとのこと。オープンソースを活用したLinuxサーバ構築授業の報告では、Linuxの効果的な学習にはLinuxマシンを一人一台準備するのが理想的ですが、経済的な理由により困難な場合が多いので、オープンソースの仮想環境を使って、一人一台の仮想マシンを安価に構築したということでした。仮想環境を学習に使うことは、本学においても何名かの教員が実施しており、かなり浸透している方法ではないかと思います。

「家政系・その他」として、「携帯電話によるミニテストの自動採点システムの構築」（東京家政大学）、「グループウェアを活用したマンガ利用参加

型授業による実務能力の養成」（産業能率大学）、「iPadを用いたフィールドワークの実践」（立命館大学）の3件の発表がありました。携帯電話によるミニテストの自動採点システムは、予習教材をWeb教材として配布し、それに関連した問題の解答を携帯電話等のメールを使って収集し、学生の予習状況に応じた講義ができるシステムです。システム自体は目新しくないと思いますが、予習をさせるためにシステムを使っている点が参考になると思います。マンガ利用参加型授業は、問題解決ゼミのテーマとして「市場セグメントの理解—マンガを題材に一」を設けて、グループウェアツールを使ってディスカッションさせるというものです。この大学では、ノートPCの携帯を義務付けており、入学時からPCを使った操作になれている学生が多いので、学生はグループウェアを効果的に利用していたとのこと。iPadを用いたフィールドワークの実践は、携帯電話を情報入力装置として使い、iPadをWeb等の閲覧に使うことにより、フィールドワーク時のリアルタイムな情報操作を可能としたことが報告されました。ただし、機器の操作にはある程度の慣れが必要であることを認識して、参加する学生にはそれなりの準備させる必要があるとの指摘がありました。

ゲームやマンガなど学生の興味のあることを取り入れ学生の学習へのモチベーションを高める工夫、グループ学習を円滑にさせるためや予習・復習をさせるためにICTを有効に活用している事例等の報告を聞いて、ICTの教育への活用を進める本学において参考になる点が多くあると感じました。当面は、プログラミング教育への取り込みを検討していきたいと思います。



発表会の様子

大学間連携SD研修会参加報告

学生サポートセンター事務室
瀧澤 浩基

平成23年9月9日、山形大学で開催されました大学間連携SD(Staff Development 職員の能力開発)研修会に参加しました。この研修会は、大学の垣根を越えた職員の相互研鑽を目的に、47校からなる「FDネットワーク“つばさ”」が主催しており、今回は「ケース・スタディによる大学事務改善」をテーマに、全国の大学、短大、高等専門学校などから幅広い年齢層の70名が参加しました。

内容としては、グループワークを中心とした3部構成で10グループに分かれ、各グループがディスカッションを行い、その成果としてプロダクトを創出する形式で行いました。

研修会は、冒頭に山形大学教育開発連携支援センターの小田隆治教授より開会の挨拶があり、その後アイスブレイキングとして各グループで自己紹介を行いました。

次に、オリエンテーションとして、小田教授より今回の研修会の目的、趣旨の説明等がありました。今回の研修は、目標を立て、その前に立ちはだかる難問(ハードル)を乗り越え、目標を達成するまでの紆余曲折のドラマを作成することによって、現実に対処する力を身につけることを目的としています。このドラマ作りが、今回のテーマである「ケース・スタディ」ということになります。

引き続きミニレクチャーとして、「個人と組織を活性化するSD」と題して、大学の現状、教職協働、事務職員とSD、仕事をなす基盤、仕事に必要な能力、優秀な大学職員になるための5つの鉄則等についての講義がありました。

プログラムⅠ「自分の職場の見直しと理想とする職場を考える」では、まず「あっとおどろく大学事務NG集」、「コントすてきな大学事務名場面集」を鑑賞しました。その後、グループワーク「自分の職場の分析」として、自分の職場の良いところ、悪いところ、理想とする職場を各自まとめ挙げました。

プログラムⅡ、Ⅲでは、「職場環境の改善を考える」、「こうすれば職場環境は改善できる」をテーマに、各グループで最後の発表会に向けた発表方法の検討やシナリオ作りを行いました。具体的には、①1年後の職場環境改善の目標設定、②里程標の設



山形大学(研修会場)

定、③工程表の作成、④現実に起こる試練の設定、そして⑤問題を乗り越えるための対処法を考えることです。

最後に各班5分程度で全体発表会を行いました。私の班では、パワーポイントを使って上記①～④を説明し、⑤は悪い例、良い例の演劇を行いました。他の班ではコントや漫才などを交えてユーモアのある発表もあり、大盛況のうちに終わりました。

研修会終了後は、情報交換会を行い、全国の大学職員の方と交流を図りました。SDの内容を網羅するには非常に短い研修会ではありましたが、積極的に意見交換等を行い有意義な研修会となりました。

さて、今回「FDニュース・レター」としてリニューアルした紙面にページを割いていただきましたので、少しSDについての考えを述べさせていただきたいと思います。



発表会に向けた検討の様子

平成20年12月の中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」において、「大学経営をめぐる課題が高度化・複雑化する中、職員の職能開発（SD）はますます重要となってきた」と書かれています。中教審がこのような答申を行った背景には、18歳人口が減り、競争と淘汰の時代を迎えた現在、職員の役割はますます大きなものとなっており、SDが急務であるとともに、SDとFDの両輪が機能しなければ、今後の大学発展は望めないと言っても過言ではないからだと思います。大学を取り巻く環境は、目まぐるしく変化しており、その変化に対応しながら自らの大学の個性や特長を活かし、建学の精神の下発展するためには政策を考え、実行できる職員の重要性が増してきているのは間違いありません。

また、大学の一般大衆化の到来により、学生の学力、意識は多様化しており、よりきめ細かな学習支援、生活支援、進路支援等の支援強化の重要性は増しています。

このような状況においては、教員でも職員でもない範疇の業務は拡大し、その対応に職員が積極的に当たらなければならないケースが増えており、より高度な能力が必要となってきました。また、職員の業務範囲は人事、経理、入試、広報、情報システム、就職支援、さらには教育環境整備、経営実務、政策立案や経営管理等多岐に渡っており、広範囲の能力が不可欠と言えます。

ところで、SDを行う際の基本ですが、職員が会得すべき能力とは具体的には何でしょうか。大学業務に必要な知識はもちんですが、モチベーションを高めること、コミュニケーション能力や問題解決力、マネジメント能力なども非常に重要です。



発表風景

大学業務に必要な知識とは、先に挙げた人事や経理等の知識の他に、社会の動向をきちんと把握すること、また自分の大学の現状について定員や現員はもちろん財務状況等幅広く数字で理解しておくことも重要です。また、モチベーションを高めるために、仕事の目的を明確にすることや部署内外間の連携等を行うことは必要不可欠です。そういう意味では、コミュニケーション能力が必須となってきますが、何より重要なことは、問題解決力、マネジメント能力なども含め、これらが相互に作用してこそ能力が向上する、これがSDの基本だと思います。

今回の研修会の目的は、①意欲の喚起、②使命感の育成、③仕事の改善、④企画力の育成、⑤コミュニケーション能力・教育力の育成、⑥全国の大学職員との交流でした。私が必要と思う能力のうち、今回の研修では大学業務に必要な知識は含まれていませんでしたが、SDは絶え間ない自己啓発が大事であり、自助努力で成長しなければならないと感じました。しかし、今回のように学外で研修を受けることは、他大学の状況も知ることでできる有意義で刺激を受ける絶好の機会であることは間違いありません。上述中教審答申にも「各大学が学内外におけるSDの場や機会の充実にも努めることが必要である」と書かれていますが、今後OJT(On the Job Training)にのみ頼るのではなく、今回のような研修会等に本学職員も積極的に参加することは、大変意義深いことだと感じました。もちろん、研修の成果を日々の業務に活かすためにはどうすべきかを個人で考え、組織として構築することも肝要であることは間違いありません。



筆者（右下）と同じグループメンバー

FD活動 行事（実績）

日 程	行 事
4月 5日(火)～	教育アドバイザーによる前期学生面談開始
4月14日(木)	第1回FD研修会 新任教員対象CANVAS研修会
4月18日・19日(月・火)	学生FD説明会（学生対象）
4月21日(木)	第2回FD研修会 富田房男氏講演 ～大学発知財のこれから～
5月 9日(月)	23年度前期ピアレビューの実施開始 7月1日まで
5月12日(木)	第3回FD研修会 長谷川学長講演 ～キャリア教育その本質は何か～
5月26日(木)	23年度 第1回新任教員研修会（7名参加）
6月 2日(木)	医療情報学科 23年度新任教員講演会
6月 6日(月)	学生FDによる 副学長FDインタビュー
6月 9日(木)	情報メディア学科 23年度新任教員講演会
6月 9日・10日(木・金)	SD研修 初任者研修会 参加（私大協北海道支部主催）
6月16日(木)	先端経営学科、システム情報学科 23年度新任教員講演会
6月30日(木)	第4回FD研修会 新任教員対象POLITE研修会
7月 7日・ 8日(木・金)	SD研修 中堅指導者研修会 参加（私大協北海道支部主催）
7月 7日～ 9日(木～土)	教育ITソリューションEXPO 参加（東京開催）
7月19日(火)～	平成23年度前期 学生による授業評価アンケート回収開始
7月21日(木)	学生FDによる 学長FDインタビュー
7月25日～29日(月～金)	教育アドバイザーに関するアンケート実施（1年学生と教員）
7月28日・29日(木・金)	SD研修 課長職相当者研修会 参加（私大協北海道支部主催）
8月10日(水)	平成23年度 ICT利用による教育改善研究発表会 参加（東京理科大学）
8月27日・28日(土・日)	学生FDサミット2011夏 学生・教員参加（立命館大学）
9月 2日(金)	カリキュラム・アドバイザーボード会議「卒論から見えてくるもの」
9月 9日(金)	大学間連携SD研修会 職員参加（山形大学）
9月21日(水)	大阪成蹊大学 本学eラーニングの取り組み調査来学
9月22日(木)	文部科学省 質の高い大学教育等推進プログラム（教育GP） ～ICTによる自律的FD推進モデルの構築～ の現地調査
9月22日(木)～	教育アドバイザーによる後期学生面談開始
10月 8日・ 9日(土・日)	蒼天祭で学生FD活動の展示

FD委員会WGの活動実績

WG名	ミーティング
全学教務・FD委員会	4月27日、5月25日、 6月29日 7月27日、9月28日、10月26日（予）
WG1（学生による授業評価アンケート）	7月6日
WG1（学生FDの活動）	毎週木曜日3限目に実施
WG2（ピアレビュー制度の導入）	4月18日、6月20日、7月25日 9月12日、（10月18日）
WG3（GPAとコンピテンシーの導入）	4月15日、5月27日、7月22日
WG5（イベント・教育活動支援情報の企画）	4月22日、5月12日、5月25日、 6月23日、9月16日
WG8（カリキュラム・デベロップメント）	4月13日、7月13日、9月14日

編集後記

「人と人との絆」、この表現を表立って考えさせられたことは、かつてなかった。支えられあつての人であるから、当然であると思つていたのであろう。「絆」、この言葉に新鮮さを感じたのは私一人であろうか。東北大震災は、この言葉に光があてられたようである。「人と人との絆」は、大学改革の一環であるFDにも当てはまる。FD活動は、学生と教員とをつなぎ、無意識の意識下にある絆を引き出して光をあて直す作業であると言えよう。

研究科長 長井 敏行